

君たちにとって「湘南」とは

私たちにとって「湘南」とは —40 年前の1年生の意見—

今から 40 年前の 1971 年（昭和 46 年）、「君にとって湘南とは何であるか」の呼びかけに応じた当時の 1 年生各組からの発言を、「創立 50 周年記念誌」の中から転載します。

11 組 対組競技は、毎月のように、バレー・卓球・水泳・テニス・バスケット・陸上競技と行なわれる。これらの行事は、全員の参加があってこそ意義がある。また、この行事の中に自分自身の存在を確かめ、全体と個人との調和が求められて成功してきている。



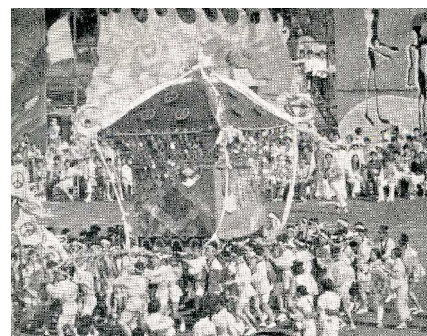
文化祭、これは、ぼくたちが湘南へ入って初めて上級生との親和性、連帯感が生まれた場だった。しかし、これは個々のクラブ内のものであって、他クラブとの結びつきがなかった。また、発表されたものに対する見る側の反響も薄かった。

体育祭（昭和 46 年度）は 9 月 26 日に行われたが、雨の為、午前で中断し、午後の部は翌 27 日に行なわれた。準備の段階で、クラスの親和、色別の 1・2・3 年にわたる縦の連帯性は高まり、互いに人間性を確かめる良い機会であった。先生の手を借りずに、自分達の力だけで体育祭を成功させたことは、大きな自信であり、意義深いものであった。こうして、ぼく達は、たえず現在を充実させながら未来へと進んで行く。

12 組 湘南、ここはあらゆる面で勉強には最適な所だろう。しかし、勉強以外の何かと真剣に取り組むとなると大変に困難な所ようである。

たとえば、クラブをやっている人はごく少数で、ほとんどの人は終業のサイレンとともに校門を駆け出して行く。

しかし、体育祭では、3 年生が受験勉強に忙しいにもかかわらず中心となり、我々は一丸となって仮装に、デコレーションに全力を注いだ。だが、体育祭は、学校行事として十分な時間が設けられたものであり、あくまでも個人の問題であるクラブ活動と同一視することはできない。



ここで、短い青春の 1 コマである高校生時代を送る我々は、もう一度『青春とは？』と自省してみることが必要であろう。自己を磨き、充実させ、あすの自分の為に備える時期に、先生方がよくおっしゃる『湘南生』という自己の殻にとじこもっているということが、いいことかどうかを…。

13 組 私たちは、以前ホームルームの時間に、「エリート意識」ということについて話し合った。論議は、「エリート意識の是非」という問題から、「正しい意識を持つべきである。」という結論に達した。

はたして、正しいエリート意識とは、何なのであろうか。現代には「エリート」と言うと、す

ぐ、学力・能力だけで考え人間としてもっと大事な「精神」を忘れる風潮があるようだ。私たち湘南生は、他から「優秀だ、エリートだ。」といわれ、それにおぼれてしまいがちである。しかし、それは学力において多少優秀であるということだけであって、精神面でもすぐれているといえるかどうか疑問である。それらが、両方とも、備わってこそ本当に人間的にすぐれた、そして、本当のエリートといわれる人になるのではなかろうか。

私たちは、今後、湘南生として「正しいエリート意識」を持ち、更に広い勉強を続けていこう。



14組 この高校にはいって、早くも6ヶ月以上が過ぎてしまった。クラスもまとまって、友達同士の結びつきも一層深いものになった、と言いたい所だが、実際にはそううまくはいっていない。4月に比べれば確かに話し相手も増え雑談も多くなったが、本当に実のある話をするのが全然ないと言ってもいいだろう。もちろん、別個の人間である以上心の底まで見せてもらいたいというわけではないし、また、そうまでする必要があるとも思わない。しかし、クラスメートであるという連帯感があるならば、もっと違った雰囲気を生み出すことができるのではないだろうか。

授業のあいまの短い時間と、昼休みだけで、他人同士の集合体の中で、連帯感を生み出すことは確かにむずかしい。しかし、それに成功した時、初めて真の高校生活を楽しむことができるのだと思う。そして、この連帯感がクラスだけにとどまらず、クラス、学年を越えて学校全体に根をはった時こそ、湘南高校が新しく生まれ変わる時ではないだろうか。

15組 湘南、それは、現在に於いては、或る意味で我々の総てであり、又、溶鉱炉であり、その将来においては青春の美しい1ページを造るものである。我々は湘南において、先生方の指導のもとで学友と共に切磋琢磨し、人格を形成していかなければならない。即ち、湘南は、我々が真理を追求し、学問を学び、道理を実践し、逞しい身体を造っていく場であろう。しかし、言うまでもなく、湘南は、単に我々の在学中の人格形成の場となるだけでなく、卒業後も、ここで培われた人格と識見に基づいて、諸先輩と後輩との深い精神的きずなに結ばれて、社会で活動していく支えともなるものである。この様な湘南であってこそ、これは、真に我々の心の故郷となり、長い人生で、湘南は懐しく思いだされるだろう。

そして、我々の心に生き続け、我々を励ます無限の力となるであろう。これによって、我々は湘南で、終生変わることのない人生の友を得ることも出来るのである。

16組 意見がほとんど出ず沈黙のHR、まとまりのない対組行事…。これが我がクラスの現状である。この原因については、利己主義、エリート意識などがあげられるだろう。そのような意識が、自分の能力をクラスのために自分から進んで出し切ろうとさせない。このような環境の中に、クラス内での真の友情は成り立ちにくいのではないか。これからのクラスの発展のために、このような現象は解消していかなければならない。そこでその解決法であるが、前に述べたHRや対組行事は、クラスの向上のために設けられたものであり、これらの活発化が最良策であると

思う。とくにHRの活発化を望みたい。話し合いのあるHRで、各自が利己的な立場をとらず、自分の意見を出し合い、クラスをもっと自分と密接なものとして考えなければいけないのではないかと、そして、お互いの理解を深め活気のある高校生活を送りたいものである。それが、クラスとして学校としての発展につながるだろう。



17組 「学生の本業は勉強である。」とよく言われる。

私達にとって、多くの知識を身につけるために、勉強は無論大切である。一方、私達は勉強以外の多くの事もやりたいと思っている。

このような中で、私達は私達なりの苦労をしている。ある時は真剣に、ある時は適当に、1日1日を過ごしている。私達には、今日という日をどのようにすごしたら一番よいのか分からない。ただ、漠然と1日1日をより楽しく、より充実させたいと思っている。

私達は、あまりにも多くの事をしすぎているのかもしれない。ムダな事を夢中でやっているのかもしれない。しかし、現在という瞬間においては、何がムダであり、何が必要であるかは判断できない。それ故、私達は生活のどんな部分であろうと精一杯努力する事が必要である。そして、このような事の積み重ねが「将来への基盤」となるのだと思う。

18組 湘南とは我々の生活において、いったい何であろうか、ある者は勉強する所だといい、また別の者は、大学へ行くためのルートでしかないという。しかしその中で、自分は惰性で学校へ来ているという者が非常に多い。何かをしなくてはとわかっていながら、湘南という大きなものに包まれたまま、毎日を目的を持たずに無気力で過ごす、そんな所が我々にあるのではないだろうか。自分からは何もしようとせず、湘南が自分に対する答えを与えてくれるのを、否定しながらも待っているのではないか。そこに我々の大きな甘さ、無責任、無気力があるのではないだろうか。

ここで我々は、湘南が我々を作るのではなく、我々が湘南を作り上げるのだということを再認識しよう。毎日の中で、しっかりした目的を持って湘南に積極的に働きかける。そこから何かをつかんでいくことが我々にとって、大切なことではないだろうか。

19組 我々のこの湘南高校は、社会から、いわゆるエリート校と呼ばれる。そして、我々の大半が一流大学というものを目指していることも確かであろう。

「アラ、お宅の坊ちゃん湘南ですよ、優秀ネエー。」よく聞かれる会話である。

しかしながら、我々が単に知識だけを受けとめるために高校教育を受けているのではないことも、これまた確かである。なぜならば、高校とは、学ぶための手段であるとともに、それ自体、生活の目的でもあるからだ。したがって勉強以外の場を通して、多くの人間と接し、相互の人間性を高めあうことも、勉強することと同等なのである。

幸いにして、湘南には行事が多い。またクラブ活動も盛んである。だが、それらが完全であるかと言えば、まだまだ、不足の面が多いのが現状であろう。単調な日々の授業に埋没せずに、精神的協調を中核とした若者の学びの場、“湘南高校”を築き上げていこうではないか。

根岸英一の湘南高校時代

鈴木 健次（28回）



湘南高校時代の同級生、根岸英一のノーベル賞受賞式と晩餐会に列席する幸運に恵まれました。たまたま妹が彼と結婚したので、親族として招待してもらったのです。華麗な晩餐会場の階段をプリンセスをエスコートして降りてきた彼の姿はまことに晴れがましく、化学賞受賞者を代表しての見事な英語のスピーチもわがことのように誇らしくて、あの語学力も基を正せば湘南高校の時代、当時の先生方に培われたのだと感無量でした。彼は「自分の基盤を作ってくれたのは湘南高校だ」と言っています。

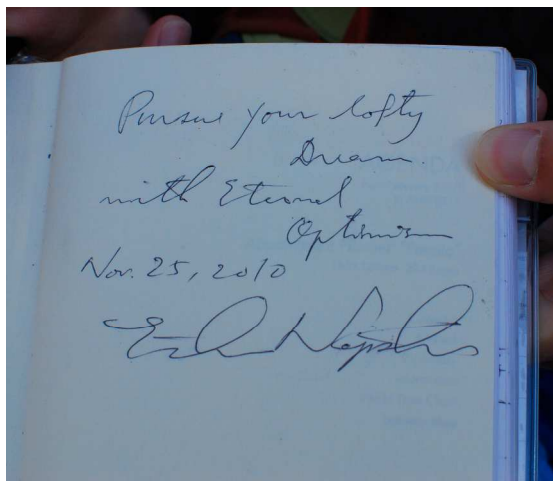
テレビでも放映された根岸のこうした姿を見て、さぞ少年時代、青年時代から輝かしい存在だったと思う人も多いかと思います。受賞が決まってから湘南高校を訪れて大歓迎を受けたときに、在校生から「根岸さんは子どもの時からよく勉強が出来ましたか？」と聞かれ、彼は「はい、よくできました」と答えましたが、中学時代から彼を知っていた私は、「あれ、そうだったかな？」と思いました。中学生の根岸英一は人並みの成績はとっていたのですが、決して出身校大和中学を代表する優等生ではありませんでした。むしろ友達と地元の相模カントリークラブに忍び込んでロストボールでゴルフの真似ごとをしたり、ゴルフ場の池で泳いだり、南林間や中央林間の林で山芋堀りに熱中していた少年だったと記憶しています。湘南高校時代の根岸についても、今回の受賞のニュースを聞いた同期生の中に、「根岸？」と首をかしげ、彼についての記憶がない者が何人かいました。

しかし高校時代のことで、私が聞きたいへん印象深い話があります。彼は1年2学期の終わりに、成績が学年で123番だと知らされたそうです。自分より優秀な生徒が100人以上いると知ったら、普通ならどう思うでしょうか。当時の湘南高校も進学校でしたから、東京大学、早稲田大学、慶応大学などに大勢入学しました。それでも誰もが志望するような大学に進学できたのは、せいぜい100番くらいまでの学生だったかと思いますが。しかし彼はそのとき、「今まで教室 スウェーデン国王よりノーベル賞を受賞 (写真略) でしか勉強しなかったのに123番なら、本気

になればトップになれる」と考えたそうです。そして2年生になってから猛勉強を始め、3年生になって実力テストで本当にしばしば1番になり、廊下に名前が張り出されるようになりました。



記念講演会 2010年11月24日・湘南高校



ノーベル賞を受賞して、彼は多くの人から色紙の揮毫を頼まれました。するとよく、Pursue your lofty Dream with Eternal Optimism! と書いていました。湘南高校で1番になることが高い希望かどうかは別として「こうと決めたら、すぐにそれが実現しなくてもくじけずに努力を続ける」ということが彼の言う「永遠の楽観主義」だと思います。

もうひとつ彼に見習いたいのは「転換の見事さ」です。教室では勉強に集中し、校門を出たら遊びに集中していた彼は、高校2年からは朝5時に起きて勉強したそうです。しかし勉強一点張りでは

ないのです。ゴルフやスキー、そして音楽が大好きで、練習にも熱心、いろいろ工夫します。思った通りのプレイができないと、自分に対して不機嫌になるほどです。根岸が日本に来るとわが家は彼の民宿になりますが、私がアメリカに行くと彼は私のお抱え運転手を務めてくれます。そんな時の彼は研究が忙しいとか、論文を仕上げなければならないとか、そんなことは一言も言ったことがありません。レンタカーはどんな車種が安上がりか、レストランは何処がいいかと、ガイド役に専心してくれます。

湘南高校はいま、川井校長先生はじめ先生方と生徒が一体となって文武両道による全人教育の伝統をさらに推進しようと努力されていると聞きました。たしかにノーベル賞受賞者やオリンピック選手、世界を舞台に活躍する指揮者を輩出したとしても、それだけでは全人教育とは言えませんね。知育偏重にならず、ひとりひとりの生徒がスポーツをするときはスポーツに熱中し、勉強するときには勉強に集中して、知・情・意のバランスの取れた成長を期することが全人教育だと思います。そうい



赤木初代校長の胸像の前で

う点で、たとえ抱

く夢の内容は違っても、根岸英一の生き方からは学ぶものが多々ある、と私は思っております。



晩餐会の様子を伝える現地新聞

東京大学名誉教授・2007年度文化功労者 辛島 昇（27回）

若者の特権とでもいうべき経験があります。燃えるような恋とか、理想を追い求める心とかがそれで、それらの経験は、歳をとってからでもできますが、それを思春期の若い時に経験することが、その人のそれからの人生を豊かにしてくれます。勉強も大事ですが、その意味から、臆病にならず、自分のやりたいことを精一杯やってみることが大切です。そのために受験に失敗したとしても、その経験は、後に確実に生きてきて、その人の人生をより意味のあるものにしてくれます。



私がいたころの湘南では、先生方もそのことをよく判っていて、生徒を温かく見守って下さったように思います。私が入学したのは湘南中学校で、それが途中の学制改革で湘南高等学校となり、その結果、都合6年間湘南にいました。終戦直後の価値観の転換ということもあって、私たちは皆やりたいことを自由にやりました。私自身も、サッカーや、自治会や、映画などにのめりこんで、成績を落とし、浪人もしましたが、先生方は、それでも温かでした。そのよき伝統が、今日の湘南になお生きつづけていることを願っています。

三菱UFJ信託銀行 最高顧問 内海 暎郎（36回）

昨年は湘南卒業後50年の節目の年であった。改めて50年という時間の長さに思いをいたすとともに、まさに映画「ALWAYS三丁目の夕日」の、その時代に湘南生活を送ったことになる（昭和33/4月入学、36/3月卒業）。古いセピア色の思い出のページを振り返ると―― 焼け跡派の入学（33/2月校舎一部火事で焼失）、緑色のバッチ（我が学年）、故村田舎監の風紀取締まり



（制服、制帽、遅刻等チェック）、壁新聞（村田先生の国語の寺子屋課外授業）、浦高定期戦（残念ながら3年間全敗）等――がすぐ思い浮かぶ。世の中は美智子様のご成婚でわき、長嶋・王・稲尾の野球で盛り上がる一方、その直後の安保騒動にむけ騒然としていた記憶がある。サッカー部の活躍、社研クラブが当時元気に活動（？）していたこととあわせ、改めて湘南の校風が自由、闊達であったと実感される。一定の規範は遵守しつつ文武両道を追及していたのであろう。私はクラブ活動には入らなかったが、相撲、マラソン等各種対組競技に参加したことが懐かしく、かつ今もって貴重な思い出、財産である。

そうした中、今もって悔やまれるのは、3年の夏にフルブライト留学のチャンスがありながら、やむを得ない事情で断念してしまったことである。なぜ果敢にチャレンジしなかったのか、本当に惜しいことをしたと思っている。在校生の皆さんも、将来についての各自それぞれの夢、希望を持っておられることと思いますが、若いときは余計なことを考えず、色々なものに勇気を持って挑戦してほしいと思います。

ニューヨーク州立大学主席教授 尾島 巖（39回）



入学おめでとうございます。私は現在ニューヨーク州ロングアイランドにあるニューヨーク州立大学で化学の研究と教育に携わっていますが、青春を謳歌した湘南高校時代を今でも鮮明に、また、充実した気持ちで思い出します。中学時代を少人数の横浜国立大学附属横浜中学校の温室で過ごした私は、一学年 400 人以上の生徒数を有する湘南高校に入学して自分の世界が随分広がり、それまで経験した事の無い多様性に触れて逞しく成長したと思います。湘南高校のモットーである「文武両道」あるいは「全人格教育」は素晴らしい伝統で、私はこの伝統に沿って強い精神力と体力を涵養出来たのだと思います。目標を定め、実現可能なマイルストーンを想定し、全力を傾けて目標を達成する事に充実感を憶えました。陸上競技、対組、合唱コンクール、体育祭、仮装コンクール、模擬テスト、東京大学入学試験、等々、全てに精力をつぎ込めた事は本当に幸せだったと思います。精一杯の努力をして正々堂々と競争に勝ち目標を達成する事は、不屈の精神と自信を獲得するのに重要です。私の充実した高校時代には何人もの良い友達が不可欠でした。激しい競争をしてもお互いの人格と才能を認め合った仲間の存在は、クラスでも陸上競技部でも模擬テストでもかけがえのないものでした。また、芸術、特に音楽と絵画に才能のある湘南生たちと親交を持てた事も私の高校生活を個性豊かなものにしてくれました。

有機化学研究に魅せられて理学博士となり研究の道を選んだ私は、幸い 30 代前半に国際的に認められるようになり、30 代後半には招聘されてニューヨーク州立大学に赴任し、米国アカデミアで研究教育に精魂を傾ける事になりました。それから既に 28 年が過ぎようとしていますが、米国での激しい競争を正々堂々と勝ち抜いてここまで来られた事に大きな充実感を持っています。米国の大学、特に大学院での研究と教育は、教授の全人格的能力を投入する事が要求されますので、元を辿ると湘南高校時代の「全人格教育」で培われた個性の確立、ヒューマニズム、不屈の精神と信念が支柱になっているのだと思っています。皆さんが湘南高校の伝統である「全人格教育」を満喫し、個性豊かに充実した高校時代を過ごせるようニューヨークより声援を送ります。

前 東京大学副学長 高橋 宏志（41回）



私は、東京オリンピックの前の年、昭和 38 年に入学いたしました。体育の最初の授業は、雨が降ったわけでもないのに、教室内で行なわれました。そこで、体育の先生から、湘南高校の沿革、初代の赤木校長先生の遺訓（日本一の学校になるべし）、硬式野球部が夏の甲子園で全国制覇したこと、先輩は至る所で活躍しておりダークダックスのゾウさんも卒業生であること、等々を叩き込まれたのです。

昼休みには、応援の練習をさせられました。そーれ、わっしょい、わっしょいという応援のスタイルは、今でも受け継がれているのでしょうか。そして、校歌を練習いたしました。漢文の先生からは、校歌第三番の「立身報国期せよ友よ」というのは、決して悪い意味ではないという注釈をいただきました。「湘南ファイト」という言葉も、幾度となく、耳にしたものであります。

先生方にも、互いに切磋琢磨する仲間にも恵まれました。今でも、正月のクラス会は続いております。湘南高校だけではなく。社会に出ると、浦高戦の浦和高校の出身者とも、なぜか波長が合うのです。助けられて生きてきたと、しみじみ実感いたします。

東京大学医学部附属病院 院長 武谷 雄二（41回）

湘南高校の40年以上先輩として、諸君たちを後輩として迎えたことを大変うれしく思っています。湘南高校は長い歴史と輝かしい伝統を誇る学校があります。しかし、伝統に押しつぶされずに、伝統を守ろうとするのではなく、来るべき時代にマッチした新たな伝統を築いていただきたいと思います。

さて、多くの学生にとって、高校時代はどの大学を目指すのか、将来の進路を決断する期間ともいえます。もちろん自分の志をはっきりと定めている方もあるでしょうが、多くの場合、自身の適性や能力を決めかねているものと思われます。

高校時代は自身を社会的に独立した存在として客観視する年代であります。さらに、教師、友との交わりを通じ、さまざまな感性、善悪の規範、人生観などを育む時期であります。また、社会の不合理性や不条理に疑問を抱きつつ、自身の進むべき方向を模索し、煩悶する時期でもあります。

しかし、振り返ると、このような精神的葛藤を経ることによって、さまざまな問題に直面した際の解決能力、適確な判断力、自身の社会的使命を自覚した高い志、それを実現するための強い意志が養われることになると思われます。

高校時代はほんの3年間ですが、将来皆さん方が大樹としてそびえるために丈夫な根をはやし、そのための栄養を吸収する貴重な時期であります。根の発育度はなかなか本人、周囲も気付くまいし、必ずしも学校の成績にも反映されないかもしれません。しかしながら、どの道に進もうとも、しっかりと根をはった木は必ずそびえます。具体的な進路を考えることも大事ですが、他人を思いやる感性、社会人としての良識、高い人間性を作り上げるということはさらに価値を持つことになります。



東京大学教授 藤井 真理子（48回）

入学おめでとうございます。数学や歴史が好きで美術が不得意、体育館で部活に励み、体育祭のイベント衣装作りにひと夏を夢中で過ごした頃を懐かしく思い出します。私は、行政官として予算の作成や経済政策に関わる仕事を経験した後、現在は東京大学で経済学の一分野であるファイナンスを専門として教育と研究に取り組んでいます。

こうした道を歩むことになるとは予想していなかったのですが、もう一度高校生に戻れるとしたら、どうするでしょうか？もっと世界に目を向け、果敢に挑戦していきたいと思います。大蔵省（現在の財務省）に入って3年目に米国の大学院に留学しましたが、「世界は広い、いろいろな人がいる」と実感しました。いながらにして世界の情報が得られる今日、さまざまな生き方があることを比較的容易に知ることができます。自分の手が届かないように思えることでも挑戦できるかもしれません。高校生の頃に興味を持って積み重ねたことは、その後大いに役立ったのですが、合わせて憧れを持つ気持ちがあれば、よりしっかりした将来への準備ができたように思います。憧れを持たせてくれる何かを見つけ、挑戦してゆかれることを期待しています。

フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者 大野 和士 (53回)

皆さん、ご入学おめでとうございます。

初めて湘南高校の正門に向かう坂道を上っていったあの日、先輩たちがクラブ活動の勧誘をしている姿が見えました。陸上部、野球部、フットボール部。そこで私の耳に入ってきたのは、校門の前にある桜の木のそばで、ひらひらと舞い散る花吹雪の中に響く、混声合唱団の先輩たちの歌声でした。何て美しいのだろう。当時から音楽家を目指していましたが、クラブ活動でも音楽をやろうとは思っていませんでした。その歌声に誘われて入部した私でしたが、そのクラブ活動がわたしの指揮者人生の原風景となったのです。入学当時は20数名の合唱団でしたが、その後、部員勧誘にいそしみ、2年生の時には、50名を、3年生の時には90名を越える大所帯となりました。それを元にして、他の音楽クラブ（弦楽部、ブラスバンド部）の部員の協力も仰ぎ、ヘンデルの「メサイア」、モーツァルトの「レクイエム」などを演奏、指揮できたのは、忘れられない思い出です。

勉強はもちろん大切とおきましょう。しかし、それ以上に芸術の根本である、感動する心、仲間とのつながりは、人生にとってかけがえのないものです。私のような「異端者」もすくすくと育ててくれる雰囲気が、湘南高校には息づいています。皆さんも、どうぞ有り余る若いエネルギーを、高校生活で、思う存分、燃やしてください。



(C)HERBIE Yamaguchi/Bunkamura

ワンスカイ CMプランナー 福里 真一 (62回)

イメージしてください。

大人になって、何かの拍子に、出身高校の話題になったときのことを。

「私、神奈川の湘南高校の出身なんですよ」

「湘南って、あの、太陽族とか、サザンとかの、湘南ですか。ずいぶん、カッコいい名前の高校ですね」

「そうなんですよ、だから、マリンスポーツはなんでも得意なんです。いわゆる、湘南ボーイ（or ガール）っていうんですかね。サーフィンなんて、プロ級なんです」

「どおりで、色が黒いと思いました。体も筋肉質だし。さすがですね」
それとも…

「だからといって、海なんか行ったこともないんです。なんか、日に焼けた若者が集まる場所って、自分が若者の頃から苦手で…」

「色、白いですもんね」

イメージしてください。

大人になって、何かの拍子に、相手が同じ高校出身であることがわかったときのことを。

「そうですか、あなたも、湘南高校ですか。湘南高校といえば、体育祭ですね」

「いやー私も体育祭には、全力で打ち込みました。終わったときには、充実感で、涙が止まりませんでした。あのとき、同じクラスだったやつらとは、今でも親友です」

「あなたもそうですか。私もなんですよ」

それとも…

「いやー、私、ああいふ集団で何かに向かっていくのとか、苦手なんですよ。だから、体育祭のときも、やや距離を置いて見てましたね。そのため、クラスでは嫌われ者でした」

「そ、そうなんですか…」

あなたが、もし、自分はどちらかというと後者のタイプだなあ、と思ったとしたら、将来の仕事は、「CMプランナー」が向いているかもしれません。どういう仕事かというと、テレビのCMを企画・制作する仕事で、…まあ、今、私がやっている仕事なんですけどね。



東京工業大学 マスターコース 片岡 泰之（80回）



新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。

私が湘南高校を卒業してから6年になりますが、今でも高校時代の生活を鮮明に覚えています。バスケットボール部の活動や、体育祭・文化祭などの学校行事に明け暮れ、忙しい中で勉強にも取り組んだ日々。そして、それらの思い出を共にした仲間達の顔。当時は、ただひたすら皆で切磋琢磨しながら全力で学業・部活・行事の三つのことに打ち込んでいましたが、振り返ってみれば湘南高校での3年間は、以後の私の将来を支えてくれるとても大事な経験になったと思います。

私は大学在学中に2つのことに注力してきました。それは、専門分野における知識を向上させることと、国際的な経験を積むことです。専門分野のロボット工学では、国内外のロボットコンテストで多くの成果を上げ、大学院在籍中に北米の大学への1年間の留学や多くの国際的な活動に参加しました。そして光栄なことに、こうした努力の甲斐もあってか、2010年末に開催されたノーベル賞授賞式にも招待されました。授賞式会場では、湘南高校の卒業生である根岸先生ともお話をさせていただくことができ、非常に感激致しましたと共に、先生の研究者魂に大変鼓舞されました。

こうした新しい挑戦をする原動力を与えてくれたのが湘南高校での3年間だったと、私は感じています。部活や行事で培ったリーダーシップ力、チームワーク力、精神力は、今の私の研究活動や国際活動には無くてはならないものとなっています。そして何より、辛いときにはいつでも味方でいてくれる高校時代の仲間達は、今もこれからも私の大きな財産です。

最後になりましたが、改めて新入生の皆様へ。湘南高校には、情熱さえあればやりたいことを実現するためのフィールドがあります。湘南生らしく、行事、部活、学問等、興味を持ったことに時間を忘れるほどに夢中になって取り組まれることをおすすめします。それはいつか教科書では身につけられない財産となり、思い描く将来に羽ばたく力になるでしょう。

湘南高等学校 PTA会長 川崎 雅巳（52回）



ようこそ湘南高校へ。校門に続く緩やかな坂道を登ってきた皆さんは、いよいよ湘南生としての第一歩を踏み出しました。これから始まる3年間、皆さんは何度この坂を登るのでしょうか。この坂を登って、学び、部活動に励み、友と語らい、時にけんかをし、人生において大切なものを手に入れるのです。

湘南高校には、高い目標を目指すための確かな学習環境が整っています。まず、公立高校の中では群を抜いて、設備が充実しています。広いグラウンドで走り回るもよし、体育館でボールを追いかけるもよし、図書館で5万冊の本の中から、生涯の1冊を探すもよし・・・素晴らしい高校生活が送れるはずです。

皆さんの先輩には、様々な分野の第一線で活躍する方が数多くいます。その先輩方が時に母校を訪れ、ご自身の歩んできた道を語りかけてくださるはずです。自分の将来を考える上でそうした先輩方の話は大変参考になるでしょう。これも、伝統ある湘南高校の強みのひとつです。

この3年間は、皆さんの自立を育むうえでとても大切です。湘南高校の全ての行事が生徒主体で運営されるのも、皆さんの自主性を尊重するためなのです。

そして、PTAの関わり方も、直接的な手助けを極力控え、精神的な支援を行っていくことにあります。このような考え方を私たちは「モラルサポート」と呼び、皆さんの自主性を最大限に引き出していきたいと考えています。

多くの試練が待ち受けていると思いますが、その困難を乗り越えていくのは皆さん自身なのです。PTAは、皆さんがこの湘南高校で心身ともに成長していくことを心より願っています。そして3年後の卒業の日、湘南の坂を下りていくその時まで「モラルサポート」で支えていきたいと思っています。